

あとから来る者のために
坂村 真良

あとから来る者のために
田畑を耕し
種を用意しておくのだ
山を
川を
海を
きれいにしておくのだ
ああ
あとから来る者のために
苦勞をし
我慢をし
みなそれぞれの力を傾けるのだ
あとからあとから続いてくる
あの可愛い者たちのために
みなそれぞれ自分ができる
なにかをしてゆくののだ

EM による国づくり

NPO 法人 地球環境共生ネットワーク
理事長 比嘉 照夫

新年度が始まりました。本年度もよろしくお願ひします。

新型コロナウイルスパンデミックにより、従来のような対面的普及が出来なくなり、zoom による最新情報の提供とユニバーサルビレッジモデル事業の創成に力点を移し 4 年余となりました。この転換が多様な EM 普及活動を更に発展させる原動力となり、宮城県栗原市や愛知県西尾市は、市全体が EM を活用し、ユニバーサルビレッジへの取り組みが加速しています。

昨年 11 月 30 日に、第 2 回正木一郎記念ユニバーサルビレッジ・EM 国際会議が沖縄県で開催されました(故正木一郎博士はマサチューセッツ工科大学(MIT), Intelligent Transportation Research Center の所長でした)。本会議で報告されたインド、マレーシア、ハワイ等の着実な EM の社会化の事例は、地球を救う大変革に直結するものであり、国内の 4 事例も、誰でも EM を上手に使える最良の情報となりました。

特に、沖縄県北中城村の「農を活かした健康・福祉の里づくりに向けた推進事業」として、EM 研究機構が取り組んでいる北中城村 EM ユニバーサルビレッジは、第一段階整備事業の工事も完了し、実働しています。このプロジェクトは、内閣府の沖縄振興モデル事業であり、厳しい審査を経て実行されたもので、国から 5 億円の助成金が出ています。すなわち、国の予算で EM によるユニバーサルビレッジの世界的なモデル事業を行っており、近い将来の過疎地や離島振興モデルともなるものです。かつては、EM の名が付くと補助金を出さないという公の姿勢も、今は昔となっています。

① 会員の更なる EM 力の向上

日進月歩の EM 技術情報の発信をより充実します。EM 洗濯キットの無償配布や、EM グラビトンシールによるスマホの健康機器化も着実に進んでおり、会員各々の EM 力の向上を革新的に進められるようになってきました。EM 技術セミナーや EM ウェルネスクラブの役割を更に高めることにより、各々が地域の環境や健康を守る指導士的な役割を担えるように仕組みを強化します。「愛と微生物のすべて」及び「日本の真髓」には、無限の情報が込められており、答えは、すべて、その中にありますので、繰り返しお読みください。

② 水圏の環境改善と生物多様性の向上

EM による水圏の環境改善対策は国内外で着々と進んでいます。水系における EM の整流・結界技術の確立によって、難分解の化学物質の無毒化や、広域の水圏の環境改善対策も低コストで容易に実行することが可能となっています。宮城県の南三陸や気仙沼の水産加工場からの排水浄化と汚泥減少、三河湾や三重県の白石湖、愛知県の堀川等々、驚嘆すべき明確な成果がでています。この結果を多くの自治体が活用できるように対応したいと考えています。

③ EM 技術による福島の復興支援

福島の復興支援活動は、第 9 回環境フォーラム「うつくしま EM パラダイス 2019」や国際常温核融合学会誌等での報告で明らかなように、放射能汚染対策は完了し、その次のプロジェクトとして、真に環境や健康を守り、経済的にも豊かになる世界モデルとしての善循環的自然農法を普及し、福島の有機農業立県化を更に積極的に推進しています。福島県内には着々と優良事例ができており、EM 研究機構が技術サポートを行なっている NPO りょうぜん里山学校を核とするグループが農林水産省の農村型地域運営組織(農村 RMO)に選ばれました。また、2025 年 2 月に開催されたオーガニック・エコフェスタ「身体に美味しい農産物コンテスト」で、ブロッコリー部門およびコマツナ部門で最終優秀賞を、ホウレンソウ部門で優秀賞を受賞しました。

④ 福祉施設や学校における EM 活用の強化

EM 技術の進化によって、福祉施設や学校における活用も進み、多様化できるようになってきました。その基本は、塩を 0.5%、EMX GOLD を 1/10,000、EM グラビトン炭粉末を 1/10,000 添加した良質の EM 活性液や EM 整流炭による結界の応用等々で、EM の投入量は半分以下にすることが可能です。より安全で快適、低コスト、高品質で持続可能な EM 生活を学校中で日常化することです。

本年度も会員皆さま方の EM 力がさらに向上することを期待しています。

EM 讃詞

EMさんごめんなさい
EMさんありがとう
EMさんお願いします
重力波、善循環、蘇生(3回繰り返す)
EMさんありがとう
EMさん大好きです
EMさん愛しています



通常総会出席者限定セミナー

2月27日に開催された第26回通常総会の後に、通常総会出席者限定セミナーが沖縄の会場参加とオンライン参加のハイブリット方式で開催されました。今回は3人の方に発表して頂きましたので、発表概要をご紹介します。

「宮古島 New Revival Academy での活動報告」

EM 研究機構 富田 直津

宮古島 NEW REVIVAL ACADEMY は、18,000 坪の広大な敷地に建つ古い修道院を改築した施設です。運営は一般社団法人 DARC 大きな和が行っており、就労継続支援 B 型と就労移行支援を提供しています。この施設では、アルコール依存症や薬物依存症、ギャンブル依存症などからの回復を目指す方々が、心身ともに蘇生し、新たな生き方やスキルを日々の生活を通じて学んでいます。

ここでは、広大な敷地を活かし、EM を活用した農業を実践しています。2021 年に 5 株からスタートしたバナナ栽培(品種は比嘉教授お勧めのアップルバナナ)は、現在、3,000 m²の面積に 350 株を植えています。週に 2 回、灌水パイプを使って EM 活性液を施用し、月に 1 回、1 株あたり 500g のボカシを施用しています。収穫したバナナはすべて宮古島内で販売され、人気が高く、高値で取引されています。現在、有機 JAS 認証を申請中で、夏には取得予定です。

バナナ畝間のスペースを活用し、大豆と麦の交互連作を行っています。大豆は「下大豆」という在来種で、手間がかかり生産性が低いため、地元では栽培が途絶えつつありますが、在来種の保存の重要性から育てています。栽培では、植付け時と 2 ヶ月ごとにボカシを施用しています。麦は「来間(くりま)」という風に強く折れにくい在来種で、60 年前の宮古島の原風景にもなっていた品種です。島内の農家一軒のみが種子を保存しており、その種子を譲り受けて栽培しています。12 月と 2 月には、10kg/反のボカシを施用しています。大豆や麦専用のコンバインがないため、刈り取りと脱穀は手作業で行い、その後は冷蔵庫で保存しています。今後は、これらの大豆と麦を使って味噌作りを予定しています。

敷地外に、5 反歩と 4 反歩の 2 カ所の畑を借り、EM を活用してサトウキビ栽培を行っています。また、興味深い試みとして、サトウキビ収穫後の残渣をマルチ(被覆材)として利用し、後作としてジャガイモを栽培しています。サトウキビの作付け時期に検討が必要ですが、うまく行けばサトウキビ残渣を利用した効率の良いジャガイモの不耕起栽培が可能となります。

【宮古島DARC】

- ・ 50年前の修道院
- ・ 敷地面積18000坪
- ・ 2021年6月から借り受け
- ・ 利用者10名、職員3名
- ・ 部屋数23室
- ・ 施設敷地内、種は検流結界処理済
- ・ EMとの関係



バナナ栽培・管理

- ・ 植え付け時にEM検流液使用
- ・ 週に2回のEM散布
- ・ 月に一度1株にボカシ500g
- ・ 枯草マルチ



【下大豆】

- ・ 在来種で小ぶり
- ・ 味噌用
- ・ 麦の裏作での栽培



麦の栽培・管理

- ・ 播種面積2反、種麦4kg使用
- ・ 秋種え春収穫
- ・ バナナとバナナの間での栽培
- ・ 12月と2月に10kg/反のボカシ追肥
- ・ 刈取・脱穀
- ・ 冷蔵庫で保管



ジャガイモの栽培・管理

- ・ 植え付け時セラミックスでコーティング
- ・ サトウキビの残渣を使用
- ・ サトウキビの畝間で栽培
- ・ 植え付け時、ボカシ、鶏糞、活性液を施肥
- ・ 収穫後は冷蔵庫で保管



生活面での EM 活用について、NEW REVIVAL ACADEMY では 2 個の 500L タンクを利用して EM 活性液を製造しています。EM 活性液は、施設全体に噴霧されるほか、トイレ、キッチン、お風呂場の掃除や洗濯にも活用されています。

また、定期的に利用者さんや職員向けの EM 講習会が開催され、EM の販売店さんや地域の方々を対象に勉強会も行われています。昨年 11 月 11 日には、比嘉先生をお招きし、畑をご覧いただき、さまざまなご指導をいただきました。また、施設内外の整流結界処理の更新や、施設利用者および職員へのご講演も行っていただき、多くの学びの機会がありました。

今後の目標として、DARC の方々が EM を活用した農業や EM 生活を通じて、EM への理解と経験を深め、その効果を実感することで、継続的に活用し続けることを目指します。さらに、DARC の方々が得た知識や経験を地域の方々に伝えることができるようになり、この NEW REVIVAL ACADEMY が地域の方々と EM を通じて交流できる場所となることを目指しています。

*活性液
・500Lタンク2個で培養

*整流処理
・敷地内4点
・電気・ガス・水道に整流シール
・全畑の4点整流処理
・各部屋に整流ブロック設置

*清掃
・モップ掛けの際に活性液使用
・噴霧器で全体散布
・風呂場の清掃
・シンクは毎晩
・トイレ使用時
・洗濯洗剤と併用
・ヤブ小屋散布



【講習会】

・利用者、職員
・EM販売店
・地域の方々に向けて



「畑をテラプレタ土壤にし、体も EM 化させる小泉農園の試み」

小泉農園 小泉 章

小泉農園で実践している EM 活動、技術発信について発表させていただきます。

小泉農園では、EM による有機無農薬栽培を 30 年以上続けています。12 年続けている農業講座は、農作業の体験をしながら、最先端の EM 技術を学ぶ場となっています。

小泉農園では、比嘉セオリーの概念を読み解きながら、物質や宇宙の成り立ちについて、量子力学的に探究し、畑をテラプレタ土壤へと導き、人の体も EM 化させ、目に見える現象を起こして紹介しています。

結界や整流炭を活用した EM グラビトン農法の基本は、養分や成分を与えて農作物を育てるのではなく、電子や重力波エネルギーを与えて育てるという考え方です。小泉農園では、畑の条件を整え、EM を活用し、量子力学的現象が起きる状態へ、いかにして導くかの実験を繰り返しています。

タイトルにあるように、①畑をテラプレタ土壤に、②体も EM 化させる、③小泉農園の試み、農業講座とまとめ、の三部構成で紹介していきます。

① 畑をテラプレタ土壤に

まず、テラプレタ土壤についてですが、比嘉先生のネット連載の中でも繰り返し紹介されています。農作物が驚くほどよく育つ肥沃な土壤のことですが、この土壤を EM は作り出すことができます。EM を長年使い続け、結界や炭の活用により、小泉農園では無農薬無化学肥料栽培が実現しています。さらに、より効果的に EM を使うことで、まだこの世にない高エネルギーの野菜づくりを目指しています。

比嘉先生は言います。

「EM で無農薬栽培は当たり前。そんなところで満足してはいかん。食べたら病気が治るくらいの野菜を作りなさい。」この言葉が、僕の野菜づくりの原動力となっています。小泉農園ではここ 4~5 年で全ての畑に結界を設置し、その後、継続的に整流炭を畑に入れ続けています。

活性液の連続かん水、作付けの度に畝や通路へ整流炭の追加、この重ね効果で収量も品質もどんどんよくなってきました。

小泉農園では直売型の経営をしているので、季節によってたくさんの種類の野菜を育てています。季節外れに種を蒔いたり、過去にやったことのない混植を試したりと、常に新しい実験を繰り返しています。当然、全て上手くいく訳でもなく失敗もたくさんあります。それでも、たまに、あっと驚くミラクルな収穫をもたらしてくれるときもあります。それは EM だからできる栽培形態であり、収穫であったりするのです。

結界が機能し、十分に EM が働いてくれる畑では、塩が肥料の役割を果たし、作物に吸われていくので、塩分の蓄積は起こりません。しかし、肥料になるからとやり過ぎてしまうと、作物を枯らせてしまいます。どのくらい塩をやれば丁度いいのか。そのさじ加減が難しいのです。

比嘉先生が農業生産者向けの勉強会で、EM が無限に重力波エネルギーを呼び込む仕組みを解説してくれました。

簡単に説明すると、十分に結界が機能している畑で、塩をちょっとずつちょっとずつ与えていくと、「重力波エネルギーを呼び込む回路」が動き出すというのです。

比嘉先生は何年も前から「塩は除草がてら、ちょっとずつ畑にまいていけばいい」とよく言っていました。塩は、塩素(Cl)とナトリウム(Na)に分解され、原子転換が起きて肥料成分になるという説明を聞いていました。だからといって、やり過ぎると塩害が出てしまいます。塩を養分として足りように入れようとしてしまうと、過剰になってしまうのです。塩はあくまで「重力波エネルギーを呼び込む回路」のスターターに過ぎないというのです。塩がちょっとずつ畑に入ること、その都度、微生物たちに電子が届き、重力子が動き出し、エンタングルメント(量子もつれ)とコヒーレント(量子うなり)が連動して、重力波エネルギーがやって来ます。この仕組みを強力にサポートしてくれるのが、点滴装置です。

比嘉先生は、常に楽に出来る EM 農法を考え実験して、私たちに情報提供してくれています。今日現在、農業分野において、比嘉先生が提唱するやり方をまとめると、以下の通りです。

- 1) 結界を張る
- 2) EM のかん水を繰り返す
- 3) 整流炭を入れ続ける
- 4) 点滴装置を稼働させる
- 5) 塩をちょっとずつまく

畑の物理的な条件を整えることは当然必要ですが、主にやることはこの 5 点のみ。成果が出ないのは、EM が足りてない、条件が整ってないからです。結界を畑に設置することで、EM の情報やエネルギーが逃げない箱となり、微生物がより活発に働く土壌へと育っていきます。

条件が整い、畑に EM のエネルギーが満ちてくれば、必ず現象がおきます。結界を張ったのに、獣の害が無くならない、病害虫が減らないのは、結界内の EM のエネルギーがまだ十分に満ちてないからです。

結界を張るということは、大きなプールを作ることだと思って下さい。結界を張ったばかりの畑は、水が入っていない空っぽのプールです。ここに、EM のエネルギーという水を満たしてあげないと、現象は起きられません。このプールに早く水を満たす方法が重ね効果です。

EM のエネルギーを満たすために、整流炭の蓄積と点滴装置が絶大な効果を発揮します。比嘉セオリーの概念にあるように、塩は電子をつかまえて微生物のもとへ運んでくれる役割を果たしています。この、電子を微生物へと運んでくれるということが、かなり重要なことなのだと分かってきました。塩は電子をつかまえておく力が強い物質です。塩が電子を制御し微生物を活性化させる力があるから、塩入の活性液は強力なのです。

小泉農園では、塩入活性液を何回も培養し続ける「重ね効果活性液」を作っています。

現在、小泉農園では、14 次 15 次活性液を作り使っています。重ねて作る方法を簡単に説明すると、前回作った活性液を種菌として入れるのに加え EM・1 を 1/1000 添加するだけです。この重ね効果活性液を畑で使い続けることで、生育がよくなり病害虫の発生が極端に減ります。活性液も重ねて作ることで、性能がどんどん上がっていくことを実感します。EM1 と糖蜜が手に入る環境であれば、重ねて作ることで誰でも簡単に高性能な重ね効果活性液を作ることができるのです。

この重ね効果活性液を、整流炭にも活用しています。竹を燃やして炭化させていますが、火を消す時この重ね効果活性液をかけて消しています。毎回炭焼きをするときは、前回焼いた炭を10～20%一緒に焼いて、炭も「重ね効果整流炭」にしています。さらに毎回、EMグラビトン炭も1～2%混ぜて焼いています。これを5～6年重ねて続けているので、EM情報が桁外れに累積された強力な整流力を持つ整流炭になっていると思われます。この整流炭を作付けごとに畑に追加しているので、作物が驚くような生育を見せてくれるのです。しっかりと結界が設置され、活性液でのかん水、整流炭の追加が繰り返されている畑に点滴装置を導入すると、EMのエネルギー情報がどんどん蓄積され、次の量子力学的現象が見えてきます。難しいので内容の説明は省きますが、空間の環境制御までEMがやってくれるようになるのです。

現在、EMの農業技術は、何をすればいいのか全て公開されています。土壌の状況や物理的条件が悪い土地でも、重ね効果活性液をつくり、重ね効果の整流炭で結界を張り、EMを使い続ければ、どんな作物でもよく育つテラプレタ土壌の畑にしてくれます。

② 体もEM化させる

比嘉先生に教えていただき、毎日食べるようになった「EMピューレ」という発酵食があります。これは、果物と糖分とEMを混ぜ、密封容器で1週間から10日発酵させて作ります。これを、毎日毎食食べ続けると、体がどんどん元気になっていきます。果物をEMで発酵させると、リポポリサッカライド(LPS)という免疫ビタミンと呼ばれている成分が豊富に生成されます。これを毎日食べることで、体が若返り元気になっていくのです。

比嘉先生に紹介されこのピューレを食べ続けて6年以上になりますが、体のあちこちが順番に修復されていきました。この体調の変化は、右肩上がりで元気になっていく訳ではありません。好転反応が現れ、体調が優れない停滞期もやってきます。しかし、ピューレをやめずに続けていくと停滞期が過ぎ、生まれ変わったように元気になります。体がEM化し、畑で起きている超常現象が、体でも起きてくるのです。こうなると、畑の微生物と体の微生物が連動し始めます。畑の作物の音が聞こえるようになり、その場の空間と友達になります。「友達になりたい」という気持ちで向かい合うことで、空間が友達になってくれるのです。

体が元気になって変わったことがあります。元気になったので、畑でEMをもっと使えるようになりました。

もう一つ、世の中のニュース、身の回りの不都合が気にならなくなりました。問題が解決した訳ではありませんが、問題は問題が起きたときに向かい合えばいいことで、何も起きていないうちから心配することはないと、きっぱり思えるようになりました。どんな問題も「とりあえずこっちへ置いておく」ことが出来るようになりました。この意識を持てるようになって、自分が生きている世界が輝くようになったのです。体が元気になるということは、世界が輝くということなのです。

EMは、幸福度の高い社会づくりに貢献すると謳われています。ここを、EMピューレは支えてくれます。比嘉セオリーの概念に、「人間の理は、不足の状態から発生した勝ち負け損得のルールが支配しており、必ず滅ぶ構造になっている。」とあります。この現代社会において、個人が自立して生きるということは、経済的に自立することだと思い込まされています。しかし、「個人」が、「個」が、自立するということは、人間社会の一部でしかない「経済のルール」に縛られることではないのです。比嘉セオリーの概念の中に、「個」についての記載もあります。

「個が全体であり、全体が個である。」

競争社会で勝ち抜くことだけが「個」の自立ではありません。今、私たちは微生物のように共存していくつながり方を、EMと共に作り出しているのです。ピューレを食べて健康になる人が増えれば、心に、気持ちに、体力に余裕がある人が増えます。この余裕、余力によって、唯一無二の自分の「個」が目覚めるようになり、「何のために生まれて来たか」、「何のために生きるのか」を探究する人が増えていきます。

ピューレを食べて元気になった人は、微生物の恩恵によって元気になったので、微生物の「共存共栄」、「調和融合」していくプログラムがその人の意識づくりに影響を及ぼします。目覚めていく「個」の意識が、「競争で勝ち抜く」世界を作るのではなく、「共存共栄」を前提とする生き方を目指すようになっていくのです。

「個」を自立させるために「他者」を犠牲にするのではなく、「全体」との調和のために「個」の主張をやめるのでもない。「何のために生まれて来たか」、「何のために生きるのか」、一人一人決して同じにならないこの問いに向かい合える体を、EMピューレは作ってくれます。

比嘉セオリーの概念は、私たちにたくさんのヒントを与えてくれます。しかし、この比嘉セオリーの概念、とても難しいです。どうやって理解すればいいのかわからない所がたくさんあります。発表された当初、比嘉先生が「毎日見ていれば、だんだん分かるようになってくる。」と仰ってました。我が家ではトイレに比嘉セオリーの概念の紙を貼って、毎日見るようにしています。毎日ピューレを食べて、毎日比嘉セオリーを見ていくうちに、比嘉セオリーの自分なりの解釈が進むようになってきました。畑で起きる現象だけでなく、あらゆる現象を比嘉セオリーに当てはめていくと、人の起源、物質の起源、宇宙の起源まで遡って俯瞰して見る視点が持てるようになってきます。

「ピューレを食べて元気になると、比嘉セオリーの概念まで読み解けるようになる。」

比嘉先生はこれさえも見越して、ピューレを奨励しているのではと思うほどです。ピューレを食べ続けるということは、ただ元気になるというだけのことではないのです。未来が開けるのです。世界が輝くのです。今、生きていることにワクワクするのです。

③ 小泉農園の試み、農業講座とまとめ

小泉農園では、月に一回農業講座を開催しています。

EM 技術を伝え、地球を救う大変革を自らの手で行う実践者を育てることを目的として行なっています。比嘉セオリーの概念を読み解きながら気がついたこと。生命の起源、物質の起源、宇宙の起源、それ以前の成り立ちまで意識を及ばせれば、人類は同じ所から生まれ、枝分かれしていったことに気がつきます。私たちは、紀元前一万年以上前から交雑を繰り返し混血することで、人類という種をつないできました。私たちの先祖は、同じだったのです。五千年以上一万年以上遡れば、人類は皆兄弟親戚です。このことについて、すでにたくさんの人たちが気づき始めています。EM は私たちに、「生き物はみんな仲間なんだ」、「同じ地球に生きる命なんだ」と、肌で感じさせてくれます。私たちは、EM と出会えた感動を、EM によって開かれていく新しい未来を、ドキドキワクワクしながら感じているはずです。

私たちは、今日、何かを感じるために、ここへ集まりました。EM と共に暮らすことで感じる、言葉では言い表せない、大切な何かを、次の世代につなぐために、「力を合わせて生きて行きましょうね」という気持ちを確認するために集まりました。この「大切な何か」を一言で言い表すことはできません。しかし、言葉はなくても、感じているはずです。今日、私たちは、同じ「大切な何か」を持つ兄弟親戚が、こんなにもたくさんいることを、全身で感じるために集まったのです。

思い出して欲しい。私とあなたは、遠い昔、兄弟であったり、親子で会ったり、恋人や夫婦であったりした世界を生きていたかもしれないことを。仏教の世界に「輪廻転生」という言葉があります。人は、生まれて、死んで、再びこの世界に生まれ変わるという考え方です。人類の全ての人が輪廻転生を繰り返していると仮定するなら、あなたと私は、前世で、過去世で、兄弟だったかもしれない、親子だったかもしれない、恋人や夫婦だったかもしれない、だから今、こんなにワクワクした気持ちであなたと一緒にいられるのだと思います。私たちは、ずっと昔から「エンタングルメント」量子もつれによってつながっているのです。

EM と共に暮らしていると、この感覚に気づくようになります。考えて理解するのではなく、感じるようになるのです。さらに、EMピューレを食べていると、より未来が開かれ、より世界が輝き、より強くこの「大切な何か」を実感するようになるのです。この感覚をたくさんの人に体験してもらいたくて、EMピューレの作り方を講座の参加者に伝えています。講座だけでなく、僕のインスタグラムのアカウントでも、EMピューレの作り方を公開しています。インスタグラムは、ネットにつながる端末さえあれば、世界中どこでも見ることが出来ます。しかも、インスタグラムは翻訳機能までついているので、日本語で書かれているキャプションも、見る人の自国語へと変換してくれます。

私たちはすでに、境界の無い世界、ボーダーレスの世界にいます。世界中にいる兄弟親戚のために、インスタグラムを通じて EM 技術を発信する試みを、小泉農園は続けています(小泉農園公式インスタグラムへは右の QR コードからアクセスできます)。



@S_H_P_Q

「量子の目からEMを理解する」

諏訪東京理科大学元教授・工学博士 奈良 松範

セミナーでは、私が1月に視察した小泉農園で得た情報と今回の小泉さんの発表内容について考察しました。小泉氏の農の基本は「電子・重力波エネルギーを与えて、育てる」ということでした。そして、結界をつくり、決められた作業を根気よく繰り返すことが成功の秘訣です。以下では、この秘訣としてリストアップされた5項目について、量子論の目で見ていきましょう。

1. 結界を作る

農地に結界を設置すると、EMの情報やエネルギーが逃げない箱となり、微生物がより活発に働き、より良い土壌へと育っていく。結界とはそもそも何だろうか。

結界の形、数学ではトーラスと言い、[図1](#)に示したように様々な形がトーラスの仲間になる。結界はトーラスの仲間であることがわかる。

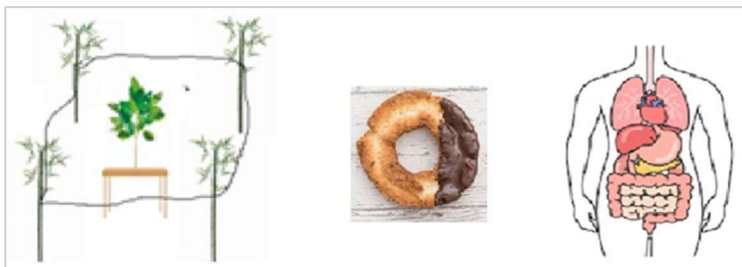


図1.結界の形はトーラス(数学用語:トポロジー学)

[図2](#)はレーザーを使ってトーラスを作った場合のシミュレーション結果を示した。ここでトーラス結界を作る時の重要な点が見えてくる。4本のレーザーだけでは安定したトーラスはできず、壊れやすかったのだ。そこで、結界の中心に1本、軸となるレーザーを加えるとトーラスは安定する。その通り、安定した結界を作るには5本目のレーザーが必要だった。

[図1](#)の神事を執り行う神籬(ひもろぎ)が作る結界を見てほしい、なんと、結界の中心に榊が立っている。四方に位置する神木と中心に置かれた神木、科学的な計算による結果と同じ配置をとっている。神事の始まりに現代のような科学計算をしたとは考えられず、先人の智慧には驚かされる。

[図3](#)はトーラス結び目(数学的な説明は省略)を示した。トーラス結び目の軌道に沿って電磁波が集まり、ここから逃げ出せなくなる。さらに外部から入ってきた磁場がトーラス内部に閉じ込められやすくなる。結界は、微生物の持っている情報やエネルギーをその中に閉じ込め、これを植物に与えるために不可欠な存在、保護装置になっているのかもしれない。

因みに、結界の完成度を測るには、磁場をかけた状態で電子(量子)の移動状態を電流測定などにより推測することができる。

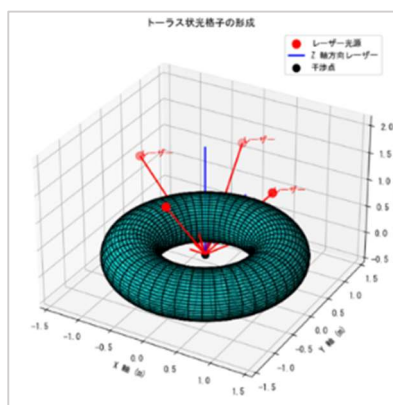


図2.強い結界のつくり方
(中心の軸ベクトルの重要性)

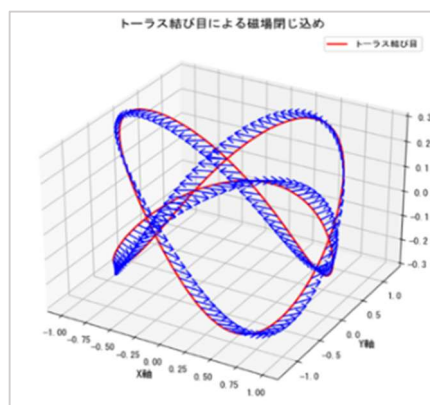


図3.電場と磁場を封じ込める
トーラス結び目の形

2. EM のかん水を繰り返す

微生物は集合することにより始めて力を発揮することができる。数は力なり、その数が足りないとネットワークの力は生まれてこない、微生物による効果は期待できないことになる。

微生物たちはお互いが量子もつれ(繋がり)により、遠く離れていても情報交換を行っていて、相互作用や協同という形で土の中のネットワークを構築し、周囲にさまざまな影響を与えている。農地でも繰り返しEMを投入することにより、EMの濃度を上げ、ネットワークの力を発揮してもらわなければならない。

また、微生物は量子ゼノン効果を利用することにより、植物の分子レベルでの変異や進化に影響を与えている(量子ゼノン効果とは、頻繁な観測によって量子状態の変化が抑制される現象)。一言でいえば、繰り返しという量子ゼノン効果を利用して、植物がより良い状態で生長するための状態に導き、そして、これを固定していたのだ。

ところで、投入した微生物はやがて死んでしまうが、コイルの形をした遺伝子は残り、このコイルによる電磁誘導が地力を高めるために役立っている。コイルがあると、そこから逃げ出せない電流が発生して、土の中で電子の有効活用ができるようになる。微生物の死骸も役立っていたのだ。

因みに、表1は、農地に存在するコイルの状態を測定するための方法を示した。

表 1. 二重らせん、三重らせんを測るための方法

測定手法	二重らせん(B-DNA)	三重らせん(Triplex DNA)
誘電率測定	誘電率が比較的低い	高周波帯で誘電率増加
テラヘルツ分光	特定の THz 吸収ピーク	水素結合増大によりピーク変化
電気伝導度測定	比較的高い電子伝導性	水素結合増加で電子伝導性低下

3. 炭を入れ続ける

木炭の穴、一つ一つから量子(光子、音子、電子など)が放出される、そして、穴から出た量子は回折により周囲に拡がっていく。そして、その効果は広い範囲に届くことになる。

木炭が生み出している量子の中でも遠赤外線(光子)は植物の生長に不可欠だ。遠赤外線は波長が15~1000 マイクロメートルの電磁波であり、そのエネルギーは紫外線に比べると低いが、量子効果を引き起こすことができる。

その効果をリストアップしてみると、エネルギー伝達効率を改善する、代謝速度を向上させる、細胞内の水の動きを促進する、発芽プロセスを促進する、細胞の伸長を促進する、植物ホルモンの生成や活性を促進する、環境ストレスに対する耐性を向上させる、病原体から植物を保護する、そして暗い環境での成長を促進する、など様々な効果がある。

遠赤外線の効果は侮れない。遠赤外線は炭だけでなく、太陽光を浴びた土自体からも放出されている。炭の有無にかかわらず、ハウス栽培の作物が露地栽培のそれに勝てない理由は、この辺にあるのかもしれない。

これまでは電磁波を中心に考えてきたが、実は、電磁波というよりも、電子のスピンとバレー(スピン、バレーの説明は省略、そういうものがあると考えてください)が主役だった。

紙面がないので筋道だけ示しましょう。電場や磁場は他の電磁場や物質などの邪魔者がいると自由に動けない、止まってしまう。それに対して、スピン・バレーは物質ではなくエネルギーの一種なので、何ものにも邪魔されず、自由に何処にでも移動できる。

移動した先でスピンは周囲の電子にそのエネルギーや情報を与えるので、結果として、電子が目的地まで行ったことになる。土という電子や磁気が自由に通れない場所でも、どんな障害があってもスピンやバレーはその目標に届き、目的を達成してくれる。因みに、土地の遠赤外線の放出、存在環境は特殊な電磁波計で測ることができる。

4. 点滴を使用する

点滴が有効な理由の1つ目は、すでに説明した量子ゼノン効果である。点滴のように頻繁に、繰り返し働きかけることは、ある状態を固定化させてしまう。すなわち、EMの持っている植物生長のための有用な情報を植物に与え、植物の健全な成長を導くのだ。

理由の2つ目は、EMが利用している量子重ね合わせと量子もつれという現象は、コヒーレンス時間だけしか存在しない(数ミリ秒から1時間以上など)ことである。この時間が経過すると重ね合わせ、量子もつれは失われてしまい(デコヒーレンスという)、その効果はなくなってしまう。だから、点滴のように期限切れになる前に継続的に働きかけなければならない。

3つ目はEM強化策である。波の干渉という現象がある。図4に示したように、2つの波の山と山、または谷と谷が重なると波は強め合い、2つの波の山と谷が重なると波は打ち消し合う。点滴は効果の波なので、EM効果の干渉も起きる。2か所から点滴を行う場合、波と波がうまく重なってくると大きな波になり、うまく重ならないと打ち消し合って消滅してしまう。これは難しい、点滴の間隔は、その土地で試行錯誤しながら決めるしかない。

因みに、点滴によるEM効果の波は音(フォノン)として伝わると考えれば、微振動計を用いて波の伝わり具合を測定することができる。

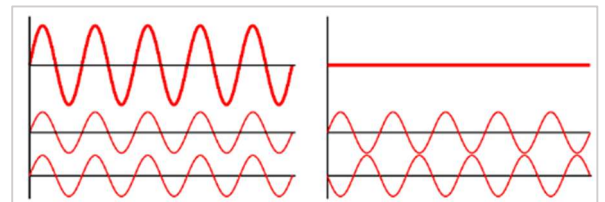


図4. 波の重ね合わせ:干渉による波の拡大と消滅

5. 上手に塩をまく

塩には様々な効果があるが、ここでは1つだけに絞ってみよう。すべての物質は陽子、中性子そして電子で構成されていて、陽子の数(中性子の数)が異なれば違う物質になる。そう考えると、塩(Na、Cl)も少し変身すれば、肥料成分(N、P、K)にもなり得る、いわゆる元素転換(元素転換とは、陽子や中性子の数が変わること)である。

図5の周期律表で肥料成分である窒素(N)、リン(P)そしてカリ(K)を見ると、そのすぐ隣に、炭素(C)、酸素(O)、ケイ素(Si)などのお馴染みの元素が存在する。例えば、植物の残渣や炭などを構成する炭素(C)に陽子が飛び込めば、あるいは地球上の地表付近に存在する元素の半分を占める酸素(O)から陽子が飛び出れば、リン(P)になることがわかる。塩素に陽子が2つ飛び込めば、カリウム(K)になる。ただし、陽子はそう簡単には移動しない。

族 周期	IA	IIA	IIIA	IVA	VA	VIA	VIIA	VIII	IB	IIIB	IIIB	IVB	VB	VIB	VIIA	0		
1	1 H															2 He		
2	3 Li	4 Be									5 B	6 C	7 N	8 O	9 F	10 Ne		
3	11 Na	12 Mg									13 Al	14 Si	15 P	16 S	17 Cl	18 Ar		
4	19 K	20 Ca	21 Sc	22 Ti	23 V	24 Cr	25 Mn	26 Fe	27 Co	28 Ni	29 Cu	30 Zn	31 Ga	32 Ge	33 As	34 Se	35 Br	36 Kr

図5. 元素転換の可能性(ありふれた元素から肥料元素へ)

6. さいごに

発生学的に脳は腸から分化して作られたと考えられている。また腸内細菌は新しく作られた神経細胞の発達に必要であることも報告されている。腸と脳は直接的な繋がりがあるだけでなく、量子もつれで繋がり情報交換している。腸内細菌の管理は脳の健康のために不可欠であり、EMによる腸内細菌叢の活性化は心と体を健康にしてくれる。

EM農法とは、突き詰めれば、結界をつくり、根気よく繰り返すことでした。植物を育む土、人の心身を育む腸、そして、生命を育む量子効果。量子論の面白さを知ってもらおうと思い、内容が多岐に渡ってしまい、各項目については十分な説明ができませんでした。また別の機会にゆっくり話したいと思っています。

情報はエネルギーです。私の持つエネルギーを情報にして皆さんにお渡ししました。逆も真なり、皆さんの脳に蓄えられた情報は亡くなった後もエネルギーとなり、この空のどこかに残ります。エネルギーはいつかまた情報となって現われる日を待っているのかもしれない。

農業も健康も、実は、これまでのニュートン力学(科学)ではなく、新しい量子力学(科学)にしたがって機能しているようです。変化の時代、これからが楽しみです。

測定機器を使ったEM診断を行っています、ご要望があればお知らせください。

「講評」

U-net 理事長 比嘉 照夫

本日は多くの皆さんに参加いただき、ありがとうございます。今回の発表は、EM 技術の最先端の内容でした。

私は農業高校卒で、大学も農学部なので、物理学は勉強していませんでした。ずっと農業にばかり携わって来ました。農業の現場を見ていると、理論とは全然違います。そのため、農学を改革しなければと考えていましたが、定年までには成し得なかったです。普通であれば、定年で終わり消えてしまう訳ですが、神様がいるのか、このような EM の活動拠点ができ、様々な人々が協力して EM の活動が継続しています。

農業の現場では、お祈りをすると作物が良く育つという現場も多数あります。そのような現場や事実を見てきたら、従来言われているような農学や物理学の世界では説明できません。お祈りの効果の源泉は、霊界のような世界からの影響だと考えています。この効果を実感するには感じるしかなく、作物等を作りながら注意深く観察を重ねます。観察力を磨くことで、この効果が分かるようになり、比嘉セオリーとしてまとめるに至りました。

小泉さんは比嘉セオリーに触発され、本日は楽しい報告をいただきました。通常であれば、小泉さんが実践されているような発想はしませんが、たくさん観察や多くの経験を重ねることで、こう言うことなのか、という確信に変わります。例えば、早朝に畑に行き作物に足音を聞かせ、挨拶をすると作物が上手に育つと、トマトの名人やキュウリの名人から聞いたことがあります。この話を聞かされて、当時は、この名人たちの熱心さによるものだと思っていました。しかしながら、最近公開した圃場での EM の点滴方法を考えていたときに、昔の名人たちの話しは本当だったと分かりました。一方で、私は理論的なことには無頓着ですが、作物を作りながら植物の成長を観察しながら勝手に自分なりの学説を立て、実践を繰り返しながら確信へと固めて行きます。その一つが EM による整流結界技術です。

EM による整流結界は、神社仏閣にみられるしめ縄やしめ飾りが聖なるものを守るために囲っており、その囲いの中と外ではエネルギーが違うことがベースとなっています。私は、幼少期から自然に向き合う感性がトレーニングされてきましたので、自然の中に存在する危険なものや、エネルギーの相違に対する感知力が身に付いています。その応用として、科学者として微生物を扱う場面において、最後は顕微鏡も不要となり、微生物培養体の性状や匂いで、どんな微生物グループが形成されているのかの判断が着くようになり、応用研究が進展しました。

EM のような有用な微生物グループを集めて研究するとなると、通常の実験では 1 万年掛かっても無理なものです。不要なものは除外し、本当に必要なものだけに絞って出来たのが EM です。昨今の EM の整流結果については、結界の凄さを皆さんにお話ししても理解が追いつかない点があります。拙著「日本の真髓」(文芸アカデミー 2019 年 8 月発行)では、沖縄を中心に大きな結界を作ったことを説明しています。沖縄に結界を作ったのが 2014 年のことですが、福島での放射能汚染対策で気づいた方法で、当初は、ホテルや EMXGOLD 工場の省エネのため、EM で作った整流素子を電気室の大型トランスに設置しました。その帰路で、車内に置いている EM 整流素子と高圧線を通る電気が反応したかのように、車の進行方向の先の電気が流れるように光が走って行くのが見えました。ある意味、実験に失敗したと考えたのですが、一方で、対照区の作れない大実験を実施してしまったことになり、EM 整流素子を設置したトランスを通して高圧線にも EM 整流素子の影響が及び、結果として沖縄に EM 整流結界が出来上がりました。その数日後、沖縄で EM 販売店会議がありましたので、その席で沖縄に結界ができたことで、電気の明るさや冷蔵庫の機能性が向上すること、PM2.5 の影響が減少すること等々、これから沖縄で起こり得るであろうことを説明し、参加者に気をつけて観察するように講演で話しました。

それから沖縄の空気感が変わりました。大気中のチリが極端に少なくなり、建物の汚れが落ちやすくなったり、雨後の車の汚れも目立たなくなりました。また、台風による暴風(衝撃波)の影響も少なくなりました。沖縄の結界は、奄美大島から石垣島まで形成されるようになり、沖縄の紫外線も遠赤外線に変わり、酷い日

焼けにもなりませんし、抗ウイルス作用も機能するようになり、パパイヤやバナナのウイルス害も発生せず生産量も増加しています。

ウイルスフリーとなった沖縄の結界内で、この事実を証明するために、宮古島の DARC の圃場でジャガイモの栽培を始めました。私の圃場で何年も前からジャガイモを栽培し、種イモを獲って毎年栽培しています。DARC では薬物依存症の回復にも EM を取り入れていますので、同圃場でも EM 栽培のウイルスに罹らない種イモが得られることで、宮古島全体に広げることができ、種イモを供給しながらその地域の産業化にも貢献し、発展して行きます。ジャガイモ生産における全経費の半分は種イモの代金ですので、大きなイモは出荷し、小さなイモを種イモとして使って行くことができます。また、氷温冷蔵だと約 2 週間で次の芽が動きますので、沖縄の秋から春にかけてジャガイモが 2~3 回収穫できるようになります。DARC の施設から、ジャガイモやパパイヤ、バナナの生産が宮古島全体に広がるようになれば、協同組合を作って優良苗の分配で生産性も向上でき、宮古島全体の産業化につながり、知名度も広がって行きます。

今日、小泉さんが皆さんに紹介された EM ピューレの活用法は、私の健康管理で実践している方法を教えたものです。小泉さんは、日本の農家のなかで、長く途切れずに、また自分でも EM 情報を提供しながら、EM が普及し始めた当初から続けている農家で、小泉さんの方法をモデルにしたいと話しています。私が EM 最新情報を提供すると、彼はすぐに応用し、とても上手に EM を活用しています。圃場やハウス内に設置する EM 点滴も公開され、多くの人々が活用するようになりました。

EM で地球を救う大変革をしようとスタートしましたが、その原点は、自分が他人のためにしたことが、結局は自分のためであり、その循環が上手く回って行くことが基本です。このような活動は利他と言われますが（利他と言わなくても良いですが）、最終的には自分に返ってくるものです。EM で儲けるのではなく、EM を広く多くの人たちに使ってもらうことで、世の中の問題をすべて解決することになります。あらゆる問題解決に取り組んでいるなかで、私も益々健康になり、量子力学的な応用も分かるようになってきました。

奈良先生の説明にあったように、量子の構造はトラス（円形）でドーナツのように囲まれています。エネルギーを集約して、その力が上がって行くと原子転換も起こる等、いろいろなことが分かってきました。畑での塩の活用において、塩を散布したところに農薬や殺虫殺菌的機能を持った遊離塩素（プールの塩素臭の様）が発生します。そうすると、病害虫が発生しなくなるという副次的な効果が現われます。そのため、小泉さんが紹介したように、少量の塩を継続して使うと塩の原子転換や副次的な効果が得られるのです。奈良先生は、私が EM の応用現場で起こった事象を話すと、量子力学的視点からどう解釈するかを考え、今日のような解説に導きます。

比嘉セオリーのなかには書いていませんが、約 30 億年前から生命が誕生し、地球は全部 DNA の海になっています。そのため、お祈りをするとすぐに DNA を通じて世界中に広がります。未だ一般的にはなっていませんが、地球に広がっている DNA が、不思議な量子的な働きに関与しているとは誰も気づいていません。世の中に不思議なことが起こりますが、今日の奈良先生の解説でもお話しがありましたが、肉体は無くなくても脳の情報は残る、という点は、地球が DNA の海になっているため、量子力学的に情報が残っているのです。また、小泉さんも発表されていましたが、仏教の輪廻転生という考えも同じ原理で動いていると考えられます。

宮古島の DARC の実践現場は、言わば、沖縄を中心とする琉球列島群に形成された結界のなかで、各地の EM 活用の農業がつながることで量子力学的なトンネル効果が発現します。ポイントは、機能的な炭を活用することですが、炭を作るときに高圧やレーザーを使いエネルギーを集約する仕組みのなかで作ることで、これまでと違う構造の機能性の炭が作れるようになりました。その結果、スピン流やバレー流が活用できるようになり、トンネル効果が起こるようになります。



通常の電子は、ある程度のトンネル効果が起こりますが、一度使われた電子は汚染となります。また電子は使うと弱ってきますが、素粒子の回転軸にあるスピン流と炭から発生させるバレー流(通常はなかなか出てこないエネルギー)を活用するとエネルギーが補充され、元の電子に戻ります。このような仕組みを回路のなかに循環させると、一度弱った電子がもう一度働くようになります。また小泉さんが取り組んでいるように、炭を投入する回数を増やしたり、塩を 0.1~0.5% 添加して常に良質な EM 活性液を作って使うことで、量子重ね効果でレベルを上げることが重要です。塩は EM と一緒に使うことで肥料的な効果を発揮しますので、塩 3% の EM 活性液を適宜使うことで小泉農園のような成果が得られます。今日の奈良先生の解説は、小泉農園を訪問したうえでの解説ですので、現場で起こっていることを量子力学的に見るとこうなんだと、最先端の情報を得ることができました。

今日の総括のポイントは、図説したスピン流とバレー流の活用となりますが、弱った電子を復活させるということは、これまであり得ない話です。炭を使うことでバレー流を発生させることができます。この理屈はどうかあれ、今日の小泉さんの発表を覚えるくらい暗記して、難しいですが、時々奈良先生の解説を何度も眺めてみてください。そうすると比嘉セオリーを読み解くよりも分かりやすいと思います。大切なのは、自分の体験と重ねながら、繰り返し繰り返し今日の 3 題の発表を振り返り、EM による整流結界にチャレンジしていただくことを期待しています。

DARC と小泉農園の報告から、結界の水準をいかに高めて行くかがポイントとなりますが、畑に設置した結界の基点に EMXGOLD や EM グラビトン炭を繰り返し繰り返し使うことで、結界の水準を高めて行くことができます。また、EM 活性液を作るときに 1/10,000 量の EMXGOLD を添加し、塩も併用することで、良質な高波動の EM 活性液ができますので、結界の水準を上げて量子力学的な EM の機能が向上するように管理することです。実践例は小泉農園がモデルとなりますので、できることから真似して取り組んでください。

もう一つは、明日の視察場所でも取り組んでいる例として、EM を浸み込ませた資材と EM グラビトン炭を使って煙を発生させる方法があります。先ほど紹介したように、地球は DNA の海なので、煙に EM の情報を乗せることで、露地やハウス内に煙を使って EM の情報を拡散します。この方法で、サンシャインファームでは、トマトを栽培していますが、温室コナジラミやサビダニの発生が認められません。私のバナナ園では朝夕と二回煙を炊いていますが、バナナの生育が夏の果実のように太り始めています。露地で煙を発生させると、消防に通報される恐れもありますのでご注意ください。

沖縄の整流結界をモデルとして、国中で EM を活用しようと計画しているインドに話を持ち掛けているところです。インドは、ご存知のように、シッキム州は農業政策に EM を活用し、完全有機農業の州となりました。また昨年の第 2 回正木一郎記念ユニバーサルビレッジ EM 国際会議では、下水処理場で EM を導入してとても良い結果がでているので、国中に EM を広めように取り組んでいるところです。また、FAO(国連食糧農業機関)もこの取り組みを高く評価し、様々な国で有機農業だけでなく、慣行農業においても肥料の代わりに EM を活用することで、費用を抑えながら収量アップが期待できる技術として EM 活用を推進しています。

★第 26 回通常総会出席者限定セミナーダイジェスト版

動画視聴のご案内 (会員限定)

2 月 27 日に開催された通常総会出席者限定セミナーでの発表をまとめたダイジェスト版動画を配信します。配信期間中はインターネットに繋がるパソコン、スマホがあれば、お好きな時間にダイジェスト版動画が視聴できます。

【配信期間】 4 月 18 日(金)の朝 9 時~4 月 21 日(月)の夜 9 時まで

視聴をご希望される会員の方は **4 月 14 日(月)**までにお名前と、「ダイジェスト版視聴希望」と標題に明記の上、事務局(info@unet.or.jp)へメールにてご連絡をください。

視聴用 URL は 4 月 17 日(木)に事務局よりメールにてお知らせいたします。

★令和7年第2回 EM 技術セミナー開催のお知らせ(会員限定)

令和7年第2回 EM 技術セミナーを令和7年4月25日(金) 14時～16時に開催します。

セミナーへの参加申込は当会のホームページ(<http://www.unet.or.jp/>)のインフォメーション欄から受付中です。お申込み専用ページからウェビナー登録いただきますよう、お願い申し上げます。**お申込みの締め切りは4月24日(木)**です。

なお、セミナーのプログラムにつきましては、後日、当会のホームページでお知らせします。

※ 令和7年第2回 EM 技術セミナーは U-net 会員様限定の配信となっております。

ウェビナー登録時、ご記入いただくお名前と会員様のお名前が違う場合、参加登録が出来ない事がございますので、ご注意ください。また、グループ、法人会員の皆様は、氏名に加えて、所属するグループ名または法人名を記載いただきます様、お願い申し上げます。

例) 姓 名

ウェビナー登録についてご不明な点がございましたら、U-net 事務局にお問合せ下さい。

➤ 「土づくり講習会」の歩み第4集が U-net の HP から PDF でダウンロードできるようになりました。

EM 研究機構の奥本さんが技術サポートを行なっている福島県伊達市霊山町の NPO 法人りょうぜん里山がっこうが運営する農業者グループ「大石3ちゃん倶楽部」で実施された、土づくり講習会の内容や現場での取組みをまとめた冊子『大石3ちゃん倶楽部における「土づくり講習会」の歩み』第4集が、NPO 法人りょうぜん里山がっこうのご厚意で U-net の HP からダウンロードできるようになりました。

土づくり講習会の講師の奥本さんが有機農業の基礎から EM 技術の様々な活用方法まで写真や図表入りで丁寧に説明されている冊子となっていますので、是非ご活用ください。



★U-net HP> 広報> ダウンロード

https://www.unet.or.jp/public_relations.html

★大石3ちゃん倶楽部 HP:

https://date-satoyama.com/3chan/?page_id=2825

「桑野川 EM 研究会の取り組みのご紹介」

U-net 事務局

徳島県阿南市に事務局がある「桑野川 EM 研究会」の会長、大川勝定様から、会誌や活動状況を書かれた写真入りの丁寧なお手紙を U-net 事務局で受け取りましたので、概説となりますが、ご紹介します。

桑野川 EM 研究会は平成 8 年(1996 年)に設立されました。会の基本方針は次の通りです

スローガン： 「EM の技術で守る大自然」 ～自然の尊重～

合い言葉： 「EM で作って健康 食べて健康」 ～いのちの循環～

目的： 「EM の技術を活かした有機農業と環境保全活動」 ～自然との共生～

上記の基本方針に沿って、1. EM 技術の向上並びに情報の共有、2. 環境保全対策(住環境改善の推進と地域への啓蒙活動)、3. 農業・食品・健康対策(食生活と健康について考える)に取り組まれています。

大川会長からお便りによると、野菜栽培圃場が約5アールあり、第一圃場と第二圃場分かれています。

第一圃場では結界を設置し、EM ボカシ、EM 整流炭、EM 塩活性液を散布して自然栽培したミニトマトは一本に約300個の実がなり、果皮は薄く、糖度 9.0 のとても美味しいミニトマトが収穫できたそうです。

第一圃場ではモグラの姿はないそうですが、モンシロチョウやヨトウとの戦いは続いているそうです。

第二圃場の畑にも結界を設置して、畑の周辺にはミカン、柿、キウイ等を17本植え、果樹周りには、穴を掘って生ゴミ入れて EM 活性液を散布して土壌発酵で EM 堆肥化し、さらに自家製 EM ボカシも活用されています(写真 1)。

特にミカン、カキは鳥獣害の被害もなく、とても良い成果が得られて EM のパワーと蘇生力に驚いているとのこと。特に昨年は、気候変動の影響で近所の柿が軒並み不作だったのに対し、大川会長の圃場では柿の実が鈴なりに実ったそうです。写真 2 の甘柿は 11 月 7 日現在、ご近所や会合に持参 70-80 個収穫した残りです。鈴なりでも実が落下せずに味も良く美味しく食べることができたそうで、これは、これまでの取り組みにより EM の整流効果が向上し、光合成細菌の活動によるエネルギー増大、柿の木の成長力やエネルギー(免疫力)が形につながったのではと考察されています。

地方では野生鳥獣による農業への被害が大きくなっていて、鳥獣害対策は農業の継続には不可欠になっています。農林水産省のデータによると、野生鳥獣による農作物被害額は、令和 5 年度で 164 億円と高い水準にあり、営農意欲の減退、耕作放棄・離農の増加等、数字に現れる以上に深刻な影響を及ぼしています。

EM 技術による鳥獣害対策技術が確立されれば、多くの農家にとって朗報となります。大川会長はこれまで色々試されてきた経験から結界の効果を実感されているそうですが、ハクビシンや鳥の野菜への被害がまだ防げていないことや、波動は見えないのでその影響をどう判断して行くかが今後の課題となっているそうです。

大川会長は「長年の EM 活動実践を通して、EM の不思議な現象や蘇生力・パワーを感動的に実感してきました。そのことはさらなる挑戦への原点となってきました。そして、EM はいのちと暮らしの健康につながることを自らの体の健康への取り組みの中で、EM との出会いにより、すべてを蘇生の方向に導くことを確信し、感謝の思いに心から出会いに感謝しています。」と書かれていました。



写真 1: 大川会長の第2圃場(無農薬 10 余年)



写真 2: たくさん実った柿

「量子の目から EM を理解する 第 5 回 ゆらぎ、そして心」

諏訪東京理科大学元教授・工学博士 奈良 松範

未来を読む

答が決まっていないからこそ、得たいものを得ることができる。結果がわかっていないからこそ、希望に燃えているいろいろなことにチャレンジできる。最初から結果が見えているのであれば、努力もしないし、喜びもないのではないだろうか。世の中、先が見えないから、楽しい。

皆さんは学校で物理の法則を習いましたね、“もの”の動きはこの物理法則にしたがっていて、計算すればこれから起こる現象も正確に予測できることを学びました。例えば、ニュートンの法則などを使って計算すれば、明日の朝、太陽が地平線から現れる時刻を正確に予測できる。

これに対して量子論ではそのような予測ができない、観察した時に初めて未来が決まる、それまでは全く答えを予測できない。答えは決まっていない、「様子はどうか？」と現象を確認した時、初めてその結果が決まる、予測は不可能である。

明日の運命は誰にもわからない、これは確かにわからないという点では量子論と同じだが、量子論におけるわからないとは違う。運命は確かにわからないが、確率的には予測できる、他方、量子論におけるわからないは、あり得るすべての可能性が同等に存在していて、結果が予測できない状態を示している。話が長くなるので、これ以上詳しい説明は省略します。

農業に例にとれば、作付けした段階では豊作、不作、あるいはその間の様々な作物の状態が重ね合わせの状態になっていて、結果を正確に予想することはできない。当たり前である、結果が確定できないという点では量子も農業も同じだ。しかし、農業の方は確率的に収穫が予測できるのに対して、量子ではある状態に確率的に存在するのではなく、同時に複数の状態が共存している点が異なっている。量子は確率的ではなく、すべての起こり得る状態が重なっているのだ。

「答が決まっていないからこそ、得たいものを得ることができる」、単純なプレーズではあるが、量子力学的な視点と人生哲学的な観点の両方が深く関わっていた。



未来を読む：遠眼鏡

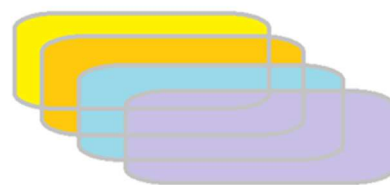
量子重ね合わせ

量子力学の本質は、すべての出来事が確定していないことにある。「重ね合わせ」や「確率的性質」と呼ばれているが、この特性こそが新たな可能性や自由を生み出す原動力になっている。生物の進化、量子コンピュータ、そして EM 効果などは量子力学なくして語ることはできない。これまでに見てきた量子現象の不確実性のことを思い出していただきたい。

量子重ね合わせは、量子状態は複数の固有状態の足し算になっている。ある状態に確率的に存在するのではなく、同時に複数の状態が共存していることになる。

量子の世界では、観測されるまで複数の状態が重ね合わさった状態(量子重ね合わせ状態)にある。何も決まっていないことこそ、すなわち不確定性こそが、状況に応じてさまざまな可能性を引き出すための鍵となっている。

例えば、量子コンピューティングでは、量子重ね合わせを利用することで従来のコンピュータよりも多くの解を同時に探索できる。量子コンピュータの性能は、スーパーコンピュータの一億倍の計算速度だといわれている。以前にも書いたが、量子コンピュータは一つ一つ考えるのではなく、すべてを一気に考えている。



量子重ね合わせ

量子ゆらぎ

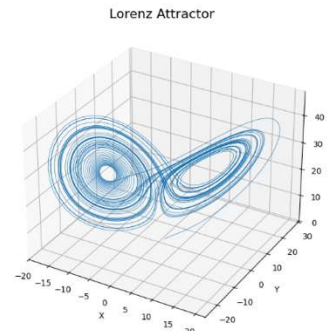
量子ゆらぎとは不確定性原理(量子論の中心的原理)から導かれる、空間においてエネルギーや場の状態が完全に静止しないで、ゆらいでいる。前述の量子重ね合わせは量子の複数の状態が重なり合って存在していた。ゆらぎと重なり、両者は関係が深い。

量子ゆらぎは量子重ね合わせを生む基盤となっている。すなわち、量子を波(波動関数)として考えたとき、量子ゆらぎから量子重ね合わせが生まれる。

量子ゆらぎも量子重ね合わせと同様に、観測によってある決まった状態に落ち着く、すなわち答えが決まることになる。そしてもう一つ、量子ゆらぎの特性は、何も存在しない空間(真空状態)であっても粒子の生成・消滅を可能としている点である。何もない場所に、何か存在するのである、お化けみたいな、奇妙な特性である。

このように考えてくると、量子論のエッセンス、大本は量子ゆらぎにあるという考えに行き着く。ゆらぎがあったからこそ、何もないところから物質が生まれ、宇宙の形成、生命の誕生、そして私たちの存在があったのだ。

ここで立ち止まって、「ゆらぎ」という言葉の意味を考えてみたい。例えば、「柔よく剛を制す」という言葉。これは固定されたものよりも柔軟なものの方が有利であるという意味で、状況に応じた柔軟な対応こそが、その可能性を広げていることを意味している。また、「Go with the flow」という言葉。これは流れに身を任せるといった意味だが、状況の不確実性を受け入れ、結果を信じる大切さを説いている。最後にもう一つ、「計画は破綻する、だが夢は実現する」という言葉がある。きちんとした計画を立てることも大切だが、それよりも夢を持つことが大切であると説いている。



ゆらぎ(解不定の例:カオス、ローレンツアトラクタ)

このように量子力学でも人生の哲学でも、ゆらいでいる状態、答が決まっていない状態にこそ、未知の可能性が秘められていることを示している。

このような不確実性があるからこそ、私たちは「得たいもの」を探し、それを形にするための行動に移ることになる。不確実性を受け入れることで、科学の分野だけでなく、人生の選択においても、豊かな成果を得ることができるのではないだろうか。

私たちの身体を構成する原子の周りに存在する電子は、次の瞬間、どこに存在するかを正確に知ることはできない、観測した時にわかるだけである。しかし、私たちはそのような量子の動きとは関係なく、元気に生きている。ミクロな視点で見れば、不確実な現象であっても、これらが集合したマクロなスケールの人間としては量子力学を実感することはほとんどない。しかし、私たちは量子力学に基づいて生きていることに間違いはない。生命も、私たちの身体も量子でできているのだから。

素粒子サイズのミクロなスケールにおける量子現象は、波を伝って、私たちのようなマクロなスケールの生活にも影響を与えているのだ。

未来を決める

量子論にはコペンハーゲン解釈という考え方がある。量子論では観測するまでは結果が未定であることはすでに知っています、この観測の内容こそが重要で、将来の現実を決めるためのトリガー(引き金)になっていることを示している。

観察が現実を作る、コペンハーゲン解釈は、「得たいものを得ようとする意思」の重要性を示唆しているように思える。観測という意思表示によって自分が求める現象を引き出すことができるのではないだろうか。

コペンハーゲン解釈の例を見てみよう。光合成において、光エネルギーが波の重ね合わせ状態にあり、観測(反応中心でのエネルギー利用など)によって最も効率的なルートを見つけ出す。それは植物自身がエネルギー利用の最適なタイミングを計っているようにも思える。

植物の成長ホルモンは運搬経路上において量子力学の波動関数の重ね合わせ状態にあり、特定の環境因子(膜電位やプロトン勾配など)によって観測されることで移動方向が確定される。膜電位などは私たち人間が外部から操作することも可能であり、ここでいう観測にあたる作業を人が促すことも可能である。

量子ゆらぎは何も存在しない空間から物質を生み出す力を持ち、様々な将来の重ね合わせとしての存在し、コペンハーゲン解釈における観察によりその将来を決めることができる。量子論のコペンハーゲン解釈を人に当てはめれば、自分の未来を自分で決めることができる可能性を指し示しているように思える。このような量子論的な考察から、私たちは得るものが多いに違いない。



観察(脳波という波動)

エンビジョン(心と量子論)

「エンビジョン(Envision)」とは、「心に描く」、「見通す」、「想像する」といった意味を持っている。語源として Vision は、ラテン語の“visio: 見る”という言葉に由来していて、“en”は、“in”という意味であるから、日本語では「念じる」、「将来への強い意志」という意味に近いのではないだろうか。

量子力学における波動関数の収縮(状態が決まること)という言葉がある。量子ゆらぎ状態は。観測者が系を観測した瞬間、複数の可能性が収縮し、1つの現実が確定する。このような観測行為による波動関数の収縮は、事前にはどの固有状態に収縮するかがわかっていない。

また量子状態の不確実性は波動関数として表現されていて、量子重ね合わせ状態でもあることを説明した。この不確実性も観察によって1つの現実が確定する。通常は、物理現象がこの観察の役割を担っているが、二重スリット実験^{注1)}のように、人間による測定も観察の役割を担っている。

量子論における観察の役割を人が担うとすれば、観察者である人間が量子状態を確定した値に収縮させることができる。すなわち、人のエンビジョン(心に描く未来)が、量子ゆらぎに影響を与えることによって、不確定であった未来を自分の望む未来に変えることができるであろう。

エンビジョンは量子論における量子ゆらぎやコペンハーゲン解釈における「観測」の役割を担っている。人が念じる心はエンビジョンであり、念じることのパワーの強さはよく知られている。

一定の条件は必要だが、成功や豊作という状態を心に強く思い描くことにより、望むものが得られるとしたら、何と不思議なことだろうか。

蛇足だが、量子論の立場からこのあたりの事情をもう少し詳しく説明しよう。量子論における基本方程式として次に示すシュレーディンガー方程式がある。 ψ は波動関数と呼ばれ、将来においてある出来事が起こる可能性を示している。

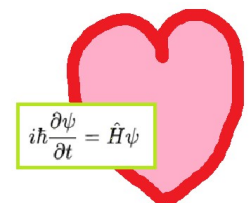
$$i\hbar \frac{\partial \psi}{\partial t} = \hat{H} \psi \quad \text{シュレーディンガー方程式(波動関数: 現在と未来をつなぐ)}$$

この波動関数は量子もつれの状態において、ある観測が他の系にも影響を与えることを示している。この方程式は、観察にあたるエンビジョンがさまざまな出来事の起こる可能性とつながっていることを意味している。

さらに量子論における時間依存する波動関数の進化に関連して考えることもできる。これは時間依存シュレーディンガー方程式とよばれており、観察が未来の出来事を決めるというだけでなく、その進化にも関与していることを示している。

観測者が未来の可能性を心に描くこと、エンビジョンにより、現象がどのように時間を通じて進化していくかを定めることにもなる。

したがって、エンビジョンは量子論の観点から見れば、人による観測、すなわち未来の可能性を心に描くことであり、同時にそれは願いを叶える(現実に変換する)ための道具となるであろう。観測前の波動関数の進化や収縮、量子もつれの非局所的性質(どこにでも存在していて、これらすべてが繋がっているという意味)がこの考え方を物理的にサポートしている。



エンビジョン(心と量子論)

しかしながら、エンビジョンを妨げるものの存在に注意しなければならない。これまでの連載の中で常にアピールしてきたコーヒレンス^{注2)}という環境が不可欠である。「好事魔多し」、良いことにはとかく邪魔が入って、とんでもないことが起こりがちである。エンビジョンの実現を邪魔するノイズを払い除けながら、あなたのコーヒレンスを確保しなければならない。心で念じた願いは往々にして、ノイズによってその脆弱性を暴露されてしまう可能性が高い、ご用心。

EM とエンビジョン

最後にエンビジョンにおける EM の役割を考えてみよう。念じる心あるいは願いはいかに強力であっても、脳から発せられる波動なので、周囲に有り余るほどのノイズに邪魔をされ、これが相手に届くことは期待できない。

EMを含む微生物、特に古細菌は、生命のはじまりから存在しているので、その遺伝子は量子情報を最も確実に保存している。量子情報は宇宙の法則や量子効果を記録しており、量子効果を機能させるための不可欠なツールとなっている。

人類は地球上では生物界の頂点にあるといわれている、それは生物の中で最も遺伝子が進化した生命体であることを意味している。しかし、進化と呼ばれているが、どこに向かって進んだのか、あるいは後退したのか、これは見方によって異なる、正確には変化に過ぎない。

量子効果を起動させる量子情報は進化という変化の中で、遺伝子と同様に、改変あるいは失われてしまったのではないか。この点においては、進化でも、変化でもなく、退化に違いない。

人類が得たものは大きかったが、失ったもの少なからずあった。何かを得ると、必ずリスクも付いてくる。生物が自分のテリトリーを拡げるために争うことは珍しくないが、地球をいくつも破壊できるような原爆を抱えて争う生物は人類以外に存在しない。人類はどうするのだろうか。

話をもとに戻そう、量子効果の利用において人の能力の足りないところを EM などの微生物が補っているという構図を考えてみたらどうだろうか。人の発するエンビジョンを微生物が受信し、それを強化して環境(他の生物)に伝達して量子効果を発現させる、そんな構図である。

私たちは、何がどうなっているか、全くわからなかった量子状態が誰かが見ること(観測)によって1つの状態に確定されることを知った。見ること(観測)はその状態に関する情報を得ることだが、情報とエネルギーとの間には $\ln 2$ という関係があるので、観測は情報であり、情報はエネルギーでもあるということになる。

ある人が畑に立ち、おいしい作物がたくさんできることを念じたとする。これは未来の観察であり、情報を発したことにあたるので、エネルギーを発したことになる。土の中の微生物はこの情報のエネルギーを受けると温存された量子情報処理能力を発揮し、受けた情報エネルギーを増幅して植物に送る。そして植物はその量子情報を受け取り、望まれた処理する。つまり、耕作者の発した情報(観測)が耕作という量子状態を一つの状態に確定させたことになる。このようなストーリーである。これはあくまでも空想であるが、これが仮説となり、さらに理論になることもあり得ると考えている。

微生物がどのような形で、どのようなメカニズムで量子情報を伝達しているのか、さらに研究を進め、別の機会にお話したいと思います。

以上

注1) 例えば、二重スリット実験の説明は以下のウェブサイトにある。

<https://ja.wikipedia.org/wiki/%E4%BA%8C%E9%87%8D%E3%82%B9%E3%83%AA%E3%83%83%E3%83%88%E5%AE%9F%E9%A8%93>

注2) coherence のカタカナ表記をコーヒレンスとしている理由: 発音記号“kō'hirəns”より

“身体に美味しい農産物コンテスト 2025”で、EM を活用されている方々の野菜が



最優秀賞を受賞されました

2月に日本有機農業普及協会主催のオーガニック・エコフェスタ「身体に美味しい農産物コンテスト 2025」が開催され、北海道アムリタファームの齋藤さんご夫妻が大玉トマト(春夏)(秋冬)両部門にて最優秀賞を受賞されました(3年連続の最優秀賞!)。また、福島県の大石3ちゃん倶楽部の高野さんがブロッコリー部門で最優秀賞、ハウレンソウ部門で優秀賞を受賞され、同倶楽部の安藤さんもコマツナ部門で最優秀賞を受賞されました。おめでとうございます!

事務局からのお知らせ

■U-net 令和7年度 第1回理事会、第26回通常総会が開催されました。

令和7年度第1回理事会及び第26回通常総会が2月27日に沖縄県の暮らしの発酵ライフスタイルリゾート内会議室(会場参加とZOOMを利用したWEB会議を組み合わせたハイブリッド方式)で開催されました。

●第1回理事会では、以下の4議案が審議され、賛成多数で承認されました。

第1号議案 令和7年度(2025年度)役員選任の件

第2号議案 第26回通常総会次第の件

第3号議案 令和6年度(2024年度)事業報告及び収支決算の件

第4号議案 令和7年度(2025年度)事業計画及び活動予算の件

第1議案では以下の19名の方が理事として継続することが承認されました。

比嘉 照夫、	石川 文雄、	田中 敏幸、	平野 勝洋、	土井 博義、
吉彌 信子、	藤間 豊、	鮫谷 陸雄、	小川 敦司、	藤木 巧一、
東市 篤実、	木場 悟、	竹内 睦治、	泉崎 富子、	武藤 麻央、
野本 千壽子、	今村 正、	芝 幸一郎、	前原 幸太郎	(敬称略)

角田善男理事は退任され、参与になられました。

・理事長には比嘉照夫現理事長の重任が提案され、出席理事全員異議なく、承認されました。

・令和7年度の執行委員(執行理事)については、昨年度と同じく、吉彌理事、小川理事、東市理事、野本理事、平野理事、芝理事の6名が継続されることになりました。

●第26回通常総会では、以下の3議案が審議され賛成多数で承認されました。青山監事による監査報告もなされました。

第1号議案 令和6年度(2024年度)事業報告及び収支決算の件
監事監査報告

第2号議案 令和7年度(2025年度)事業計画及び活動予算の件

第3号議案 令和7年度(2025年度)監事選任の件

なお、令和7年度監事として青山真紀氏の重任が賛成多数で承認されました。

正会員の皆様には、総会への出席、書面議決書や委任状のご提出にご協力をいただき、重ねてお礼申し上げます。

当会事務局は本年度も、事務局長に新谷正樹、副事務長を下地貴司、事務局スタッフとして比嘉良仁、齋藤沙、國廣真里枝、奥本秀一、安里美智子が事務局業務をサポートします。本年度も引き続きよろしくお願い申し上げます。

翌日2月28日は総会出席者対象の現場視察が実施されました。



青空宮殿



北中城村 EM ユニバーサルビレッジ